

キウイフルーツかいよう病（新系統 Psa3）に関する研究対応の状況

2014年5月に国内で初めて確認されたキウイフルーツかいよう病(*Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae* biovar3 : Psa3) は、県下の主要産地でも発生が確認され、今後も発生地域の拡大が懸念される。本病による被害は黄色系品種の「Hort16A」などで大きく、その症状は枯死や枝枯れ等、激しい傾向にあり早急な防除対策の確立が必要である。



写真1 Psa3 系統による枝枯れ（「Hort16A」）

1. 診断技術の開発

本病の診断には類似症状が多いことや従来から Psa1 によるかいよう病も発生していたため、遺伝子による正確な診断が必要であった。このため、分離細菌の系統を分類できるマルチプレックス PCR 簡易系統診断法を検討したほか、PCR 診断に供する DNA 試料調整の簡便化等を図った。このことにより Psa3 の感染が疑われるサンプルの診断を迅速かつ多量に実施することが可能となり、年間を通して最も発生が見られる発芽後～開花期頃までの葉の病徴診断結果を早期に回答できる体制ができた。

また、発病樹の伐採・伐根後における土壌中の菌密度の有無を診断できる手法もあわせてを開発した。

2. 暫定的な対処法の検討

国内での発生当初は Psa3 系統に関する情報が少なかったことから、福岡県や佐賀県など発

生県と連携して現地発生園の被害状況や発生推移の情報収集、園地内における菌の動態解明（土壌中の菌密度の推移や菌の樹体内分布等）を行ったほか、農林水産省本省関係課等の支援をいただきイタリアにおける現地調査（2014年度農食事業）、海外の Psa3 系統に関する研究論文調査等を実施した。



写真2 海外調査（イタリア・農林政策省）の状況

さらに得られた情報を参考に防除や拡大防止対策を暫定的マニュアルとして取りまとめるとともに、啓発パンフレット・リーフレットを作成（URL : <http://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryoku2/index.html>）して関係機関に配布した。

3. 今後取り組むべき研究課題の整理

収集した情報に基づき、既存品種のうち耐病性を有する品種の選抜、銅水和剤や抵抗性誘導剤などの効果的利用技術の開発、生産性を維持しつつ被害を食い止める枝切除技術の検討等が必要である。

2015年度からは、発生県など関係機関と連携して新たな農食事業課題（かいよう病 Psa3 に対して、安心してキウイフルーツ生産を可能とする総合対策技術）に取り組んでおり、効果の高い防除技術の確立を図ることとしている。

（病害班 主任研究員 篠崎毅）